



Title	リトアニアにおけるジプシーへの眼差しに関する人類学的一考察
Author(s)	唐澤, 佑子
Citation	年報人間科学. 2008, 29-1, p. 1-20
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7159
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

リトニアにおけるジプシーへの眼差しに関する人類学的一考察

唐澤 佑子

の事例から導き出せるのは彼らをエスニック・グループというよりは、アルコール中毒者や貧民などの社会カテゴリー、解決されるべき社会問題として捉えるという視点である。そもそも「エスニック・グループではない存在としてのジプシー」像は、リトニア、そしてヨーロッパに存在し続ける、ジプシーに対する過剰な嫌悪感や差別に大きな影響を与えていた。

ジプシーとはその多くがヨーロッパに住み、かつては移動生活を送っていた人々である。一般にヨーロッパのものとは異なる言語、容姿、生活様式、慣習を持っているが、その維持の程度はジプシーの集団や居住地域によって異なる。ヨーロッパ社会から見て異質であった彼らは、差別・抑圧の対象となり、現在では多くのジプシーが社会の底辺で貧しい生活を強いられている。

バルト三国の一つ、リトニアでは、全人口の〇・〇七%しかいないジプシーに対する人々の態度はとても厳しいものであった。人々はジプシーと聞いてまず、麻薬、犯罪や盗み、怠け者などのネガティブなイメージを口にする。人々はジプシーとの日常的な接觸はほぼないが、新聞やテレビなどメディアからネガティヴな情報を受け取っている。しかしインタビューの際、同時に人々は、ジプシーの音楽やダンス、情熱的な気性などポジティブな面も挙げていた。また他の見方は、ジプシーを完全なるアウトサイダー、そして関係を持ちたくない人々と捉えるものである。さらに、リトニア

キーワード

ジプシー、イメージ、エスニック・グループ、社会的集団、リトニア

はじめに

現在世界中には約六百万人以上のジプシー⁽¹⁾が存在すると考えられる。⁽²⁾彼らは主にヨーロッパ全域に住むほか、中近東、アフリカ、アメリカ大陸、オーストラリアなどにも住む。その総数を把握するのは容易なことではない。様々な理由からジプシーたち自身がジプシーと名乗らないこともあるが、各国政府はその総数を少なく見積もりたがる。その一方でジプシーの活動家や団体はより大きい数の総人口見積もり数を主張する。

ジプシーは、かつては主に移動生活を営み、行商、鑄掛屋、馬のトレーダー（ばくろう）、興行、季節労働などを職業としていた。彼らの言語はロマニ語⁽³⁾と呼ばれ、現在でもロマニ語を話すジプシーもいれば、かつての居住国の政策⁽⁴⁾から固有の言語をすっかり忘れ去ってしまったケースもある。さらにロマニ語を話すジプシーも、とくに成人は生活上の必要性から居住国（西欧）の言語を話す。現在は東欧諸国に住むジプシーはほぼ定住していると言えるが、西欧に住むジプシーには移動生活を続けている人々も多いという。彼らはインド起源と言われ、⁽⁵⁾なんらかの理由で約千年前から西へ移動を開始、十五世紀ごろからヨーロッパに出現し始めたことが報告されている。ロマニ語とサンスクリット語、インド諸語との類似性が指摘されている。身体的特徴もヨーロッパのマジョリティとは異なると認識されており、じっさいにジプシーの中には黒い髪・目、浅黒い

肌を持つものが多い。ヨーロッパに姿を現してから現在に至るまで、彼らの言語やライフスタイル、容姿の違いから差別を受け、現在でも多くのジプシーが貧しい暮らしを強いられている。

ヨーロッパの北に位置するバルト3国のひとつ、リトアニアには、政府の発表では二五七一人、⁽⁶⁾しかし実際には約三千人から四千人のジプシーが居住しているという。リトアニアの総人口の〇・一パーセントにも満たない数のジプシーに対して、筆者が一年間の留学中に直面したのは、リトアニア社会の過剰とも言えるジプシーへのネガティヴな反応である。

そこで本稿では、ジプシーに対するイメージや態度について、他のヨーロッパの例を参照しつつまとめた上で、リトアニアの人々の語りから、リトアニアにおいてジプシーという人々がどのように捉えられているのか、ネガティヴな反応の根底にあるものは何か、そしてこれらを通してジプシーと彼らを取り巻く主流社会（ここではリトアニア社会）の関係性を考察する。なおインタビューは留学中の二〇〇三年から二〇〇四年、および調査訪問した二〇〇六年におけるこなった。

一・ジプシーのイメージ

ジプシー、そしてジプシーのような集団は彼ら以外の人々、つまりマジョリティ側によってさまざまなイメージを持たれてきた。このことは、ジプシーは彼らの経済活動以外の場面では非ジプシー社

会との接触が少ないと、そして非ジプシー側の接触の回避によるものと思われる。それゆえジプシーについてはあれこれ想像され、そのイメージは流布される。ジプシーに対するイメージはネガティヴなものだけではなく、ロマンティックでエキゾティックなものもある。ハンコックは、「一般の人びとがいだくジプシーのイメージは、現実の彼らのそれではなく、物語と映画の中のジプシー像である」[ハンコック 2005:255]と述べている。非ジプシーの勝手なイメージや空想による記述や噂は、時にジプシーを貶める原因でもある。

日本ではどうだろうか。いまや世界中に散らばるジプシーだが、日本には彼らは存在しない。しかし「ジプシー」と聞けば、多くの人々は何らかのイメージを持つであろう。それは、彼らに対する伝統的なイメージである「放浪生活」や「自由な人々」というロマンティックなものかも知れない。もしくは、近年日本でもポピュラーになってきたジプシー音楽の物悲しいヴァイオリンの音色や、スピード感あふれるブラスバンドの響き、そしてフラメンコなどから連想される情熱的なダンスといった、芸術面に焦点を当てたイメージもあるだろう。そしてさらに、旅行ガイドブックの「ジプシーに注意」といった記述や、実際ヨーロッパなどの観光地でのジプシーとの接触の経験から、「物乞い」、「泥棒」というネガティブなイメージを持つことも考えられる。どちらにせよ日本にはジプシーが存在しないため、その実態は知られておらずイメージだけが先行していると言える。

ジプシーに対するネガティヴなイメージとして挙げられるのは、野蛮、泥棒、犯罪者、詐欺師、物乞い、うそつき、汚い、不真面目、働かない、性的に不品行、反社会的、知能遅滞者などである。ジプシーはうそつき、泥棒であるというイメージはしばしば民話にも登場する [Anglickiené 2002:81]。ヨーロッパ社会と異なる言語や生活様式は野蛮で、物乞いや占いをしては人々をだまし、物を盗む。定職に就かない彼らは不眞面目で働く気がなく、また汚くて貧しいというイメージを持たれている。ネガティヴなイメージはまた、彼らの職業形態からも喚起されていた。彼らがおこなう占いや呪文、魔術的治癒力は超自然的と捉えられ [Clark 2004:232]、合理性を追い求める現代の対極にある、魔力を操る迷信的なジプシーというイメージを創り出し、そしてそのような神秘性は定住社会への脅威 [McVeigh 1997:12]ともされた。

」)のように彼らは、かなり悪いイメージを持たれる一方、同時にポジティヴとも言えるイメージも持たれてきた。すでに述べたような彼らの独特的の音楽やダンスはヨーロッパの人々にも好まれ、また、ジプシーのカラフルな衣装、特に女性のスカートを好ましいという人もいる。そして、ヨーロッパの定住農耕社会において、かつては多くのジプシーが営んでいた移動生活⁽⁷⁾に対して、社会的、文化的、そして性的に「自由」[McVeigh 1997:14]で「ロマンティックな」イメージが持たれた。それはまた、網野が中近世の日本について述べたような「無縁」「網野一九八七」つまり世俗のさまざま縁と切れている、社会のしがらみから自由であるというイメー

ジとも重なる。これらは自由で情熱的でエキゾティックでロマンティックなジプシー像である。彼らに対するイメージの二面性は、多くの研究者が指摘している〔Sutherland 1986, Anglickiené 2002, Clark

2004, オーカリー 一九八六, フレーチー 一〇〇一〕、クローウェー 一〇〇一〕。

では次に、リトアニアに住むジプシーについて簡単に説明したのち、現代において人々が抱くジプシー・イメージについて、リトニアの例を挙げてみていく。

II・リトアニアのジプシー—歴史と現在—

リトアニアにジプシーが現れたのは十六世紀頃からである。ポーランドやベラルーシ経由でやってきたと考えられている。一七九五年の第二次ボーランド分割後のロシアの支配の時代からは、ジプシーに対する取締りが強化される。第一次・第二次大戦間期は比較的自由で保障された生活を送っていたという。その後リトアニアは第二次世界大戦を経て再びソ連の支配下に置かれる。一九五六年にはジプシーの移動生活を違法とみなす行政命令が下され、ジプシーは定住させられる。しかし法が制定されたとはいえ、家族単位で夏などに移動生活を送ることはあつたようである。それまで本格的にリトニア人と隣り合って住んだことがなかつたゆえ、この時から近所に住むリトニア人との間で、住居やライフスタイルにおいて様々な問題が発生した。ただ一つソ連支配下のジプシーにとっての利点

は、全員にソ連のパスポートが給付されたということである。そのソ連時代も一九九〇年三月十一日のリトアニア共和国独立宣言をもつて幕を閉じ、その後リトアニアは一〇〇四年にはNATO、そしてEUに加盟した。

現在リトアニアに住むジプシーは、出身地によって四つのグループに分類できる。それらはリトアニア系およびボーランド系ジプシー、モルドヴァ系ジプシー、ロシア系ジプシー、そしてラトヴィア系ジプシーである。⁽⁸⁾ モルドヴァ系ジプシーはソ連時代に経済的な理由からモルドヴァから移動してきたグループで、ヴラフ・ロマニ語⁽⁹⁾を話す。そのほか北部リトアニア、ラトヴィアとの国境地域にはラトヴィア系ジプシーが住んでいる。

彼らはヴィリニュスやカウナスといった大都市および地方に散らばって住んでいるほか、リトアニアの全ジプシーの約十パーセントが、首都ヴィリニュス市郊外にある、悪名高いキルティーマイ(Kiltimai) もしくはタボラス(Taboras)⁽¹⁰⁾と呼ばれる地域に住んでいる。これはいわゆるジプシーの「ゲットー」で、ヴィリニュス国際空港の裏手のさびれた工業地帯にある。リトアニアの人々に言わせれば彼らはタボラスに「違法に」住んでいる。一〇〇六年の夏にここを訪れた時は、統計では居住者数は約四五〇人だが実際は六〇〇人くらいのジプシーが住んでいるときいた。なぜなら住所登録は他の土地でも実際はタボラスに住んでいるというケースがあるからである。

この地区がなぜ有名かといえば、リトアニアの人々はここでジプ

シーガ麻薬を作つて売つてゐる、さらにたくさんの犯罪の温床でもある非常に危険な場所と考えてゐるからである。実際麻薬は売られているようで、この居住区に行くと警官の姿があり、麻薬を買いに来ている非ジプシーの姿もある。リトニア人の友人たちは筆者が「タボラスに行つたことがある」と言うと、きまって「怖くないのか?」と尋ねる。しかしこの地域に行つたとき怖いと感じられたのはジプシーたちではなく、麻薬を買いに來ている非ジプシーの人たちであった。

タボラスへ行くにはヴィリニュスの中央バスター・ミナルから路線バスに乗る。バスの中では、街中よりジプシーを見かける頻度がとても高い。終点「チゴーナイ (Čigonai)⁽¹⁾」で降りて少し歩くと、粗末な作りの家々がほとんど倒れそうに立ち並んでいるのが見える。以前ここを真冬に訪れた時は、寒さをしのぐためか、家の外壁に毛布を巻きつけていた家も見かけた。道や原っぱには無数の注射器が転がっていた。舗装道路、下水道設備、ごみ収集制度はなく、電気も通っていない。この居住区にあてがわれている住所はたった一つである。タボラスに行つたことのあるリトニア人に会つたことは今までない。

タボラスは高地タボラス (Aukštutinis Taboras) と低地タボラス (Žemutinės Taboras) に分かれてい、高地タボラスにはリトニア系およびポーランド系ジプシー、低地タボラスにはモルドヴァ系ジプシーが住んでいる。両者は言語が異なるためコミュニケーションはロシア語でおこなわれるという。また、お互ひ反目し合つており、

例えば、高地タボラスのジプシーが低地タボラスのジプシーのことを行ふ、「彼らは本物のジプシーではない、仕事もパワートも持つてゐる」と言つたり、逆に低地タボラスのジプシーが高地タボラスのジプシーについて「あそこ女性たちは長いスカートをはいていい」と非難したりすることがあるという。しかし、こうした中で低地・高地ジプシー間の結婚の例もあるという。

二〇〇四年十一月には突如ヴィリニュス市長がタボラスに建つてゐる家は非合法だとし、その一部を強制的に破壊するという事件が起つた。メディアも大勢駆けつけ騒ぎになつたという。その後もタボラスを非合法としジプシーを全員立ち退かせて工場などを建て工業地帯にしたい市側の思惑に対し、政府や人権団体は今、タボラスの合法化の方法を探つてゐる。

三・リトニア社会のジプシーへの眼差し——人々の語りから

このような状況下に住むジプシーに対して人々はどのような視線を投げかけてゐるのか。以下では筆者がインタビューした人々の実際の語りを挙げながら、リトニア社会のジプシーへの眼差しについて報告したい。なお、同じアルファベットで示したのは同一人物である。

「タボラス?死にたいのなら行けば(行つてもいいよ)。」…A

(男性、二十代)

「タボラスではジプシーたちはあなたから何か物を盗もうとする?」

⋮B (女性、三十代)

「タボラスでジプシーたちに会うときは財布に気をつけなさい」

⋮C (女性、四十代)

「タボラスに行くだって? あそこで何するの? 麻薬買うの(笑)?」

⋮D (男性、三十代)

「ジプシーたちは悪い奴らでタボラスもリトニア中で一番危険な場所だから、あそこには行きたくない自分の友達にも行って欲しくない」

⋮E (男性、二十代)

「(「ジプシー」ときいて)女の人の占い、伝説や民話などから馬泥棒、それからタボラスと麻薬を連想する。きれいな女人も連想する。固有の文化を守る人たち、働くない、何もしない人たちというイメージもある。彼らは泥棒というイメージが社会にあるので、信用されていない」

⋮F (男性、三十代)

「タボラスに関連して何かネガティブなものを感じる。教育を受けず、働くなく、正直でなく、だましたり盗んだりする人々というステレオタイプがある。長所としてはダンスと歌が挙げられる。」

⋮G (女性、二十代)

「まずきれいな洋服、音楽、ダンス、黒い髪、それから美しい女性たち。次に泥棒やうそについてお金を取る手相占いも連想する。」

⋮H (女性、二十代)

「まず、だましたり金や宝石を盗もうとしたりする占い師に閑

するネガティヴなイメージを持つ。あと彼らは服装がきれいではない。」

⋮E (男性、二十代)

Aはタボラスでジプシーによる歌と踊りのイヴェントがあつたときに行かないかと筆者が誘ったときの友人の答えである。

すでに述べたようにタボラスは悪名高い地区で、リトニア人にとつてタボラスに行くことなどありえないといった様子である。この友人も「タボラスに行くなんてまさか…」というニュアンスで、半ば冗談ではあるが「死にたいのなら行けば」と言つた。タボラスはそれくらい危険で未知の世界なのである。またDの発言に見られるように、タボラスと麻薬はほぼ同時に連想されている。B、Cはともに大学の先生の発言である。Bは「タボラスに行った」と筆者が話したときの反応である。Cは民族学を専門とする先生の発言で「タボラスに今度行くつもりだ」と筆者が話したときに返ってきた言葉である。タボラスでは麻薬問題はもちろん、様々な犯罪がおこなわれている危険な所というイメージが人々から語られた。タボラスは、行つたこともなければ行く気も到底ない敬遠してしかるべき場所なのである。

BやCのようにジプシーは盗みをするというイメージも根強い。「泥棒」というジプシーに対するヨーロッパのイメージを明白なものとして見せてくれた事件にも出会つた。二〇〇六年八月筆者がブダペストからプラハまで夜行列車で移動中に盗難事件が起つた。二人の乗客が現金や携帯電話を盗まれたことに朝になって気がつい

た。このとき車掌は筆者に向かって「ジプシーの女の子が列車に乗つていて、夜こっそりネズミみたいにコンパートメントにやつてきて盗みをはたらき、すぐに下車していった。こういうことはブダペスト・プラハ間だけでなくヨーロッパ全土で起こっている。」と言ひ放つた。もちろん誰も「ジプシーの女の子」を見かけていない。後日この事件をドイツ人の友人に話すと、彼から返ってきた反応は「僕が車掌だったらやはりジプシーのせいにするだろう」というものだった。ヨーロッパには「ジプシーは泥棒」というイメージが実際に存在することや、盗難事件があれば証拠がなくともジプシーのせいにされてしまうこと、彼らに対するステigma化を体験した出来事だった。

さらに「占いをするジプシー」像もよく語られる。EやFでは占いが彼らのイメージとして真っ先に挙げられている。二〇〇六年には、タボラスでリーガル・アドヴァイザーとしてボランティア活動をしている学生と知り合った。周囲の人から彼に必ずと言っていいほど向けられる質問が、「ジプシー（の女人）は占いをしようとするか？」というものだという。彼は実際タバコをねだられたことはあるが、占いを持ちかけられたことはないそうだ。

筆者自身リトニアでジプシーが占いをしているのはみたことがないが、占いにまつわるエピソードを話してくれた人は何人かいた。あるリトニア人の女性は小さい頃、ジプシーの女性から「友達と一緒に占いをしてあげる」と言われ、お金や宝石を要求された。そこでその友達が家から宝石を持ち出し、返すことを約束してジプシー

に渡したところ返してもうえなかつた、という体験をした。また、興味本位で占いをしてもらつた際、さらにお金を要求され、断ると「あなたに悪いことが起ころる」とののしられたという体験を話した女性もいた。占いという行為はE、Hの発言からも明らかのように、占いを通してお金や宝石類を騙し取ろうとする行為と結び付けられ、そこから詐欺や盗みといったネガティブなイメージが連想される。

ではこれらの占いの体験のように、非ジプシーとジプシーの実際の接触はあるのだろうか。インタビューからは、現在は「ジプシーはマーケットやバス・ターミナルにたくさんいる」とことや「タボラスに住んでいる」とことは知っているが、リトニア人とジプシーの日常的な接触はほんとうにないことが明らかとなつた。一方で何人かの人は、彼らが子どもの頃、家に集団でやって来て食べ物や洋服をねだるジプシーの姿を記憶していると答えた。当時のジプシーの様子を見て人々は「汚くて危険な集団で何か盗まれるかもしけないと不安になつた」、「怖かった」、「物をあげないと罵られた」と語つた。また、「父親は絶対にドアを開けなかつたが、母親は服や食べ物をあげていた」という人や、ジプシーの集団が来たら窓を閉めるようにと両親から言われたという人もいた。

「彼らは働かないから誰も彼らに仕事を与えたがらない。」：

I（女性、五十代）

「ジプシーは仕事を得たがらないし働きたがらない、それなのに政府からのお金を欲しがる。」：J（女性、五十代）

「彼らはただ、政府からの援助を無料でくれと主張する。何も

しないのに何かを欲しがる、釣に行きたがらないのに魚を欲し
がるようなものだ。」：K（男性、二十代）

⋮ E（男性、二十代）

「だます」「占い」「泥棒」といったステレオタイプと並んでよく
言わるのが、「ジプシーは働かない」といたものである。Kの
ように述べたのは前出のリーガル・アドバイザーの青年で、彼は
さらにこう言う。ジプシーはソ連時代には電気代などを払っていない
かったこともあって、何でもただでもうえると思っている。だから
彼らのメンタリティを変えるべきであって、そのために必要なのは
教育である、それから仕事をしなければ何も得られないことを知る
べき、金を稼ぐ方法を知るべきである、と。

Jもジプシー関連のプロジェクトを実施しているある団体のディ
レクターの発言である。彼女は、「ジプシーにとっての最重要問題
は何だと思うか？」という質問に、職業訓練と答えたあと、「彼ら
はリトニア社会に、彼らが働く気があるということを示すべきだ。
もし彼らが他の人々と同じようになりたいとか変わりたいといふこ
とを示さなかつたらリトニア社会の差別的な態度は変わらないだ
ろう」と述べた。そのほかにもジプシーとかかわりを持つ人々の中
には、「彼らは教育を受けたがらないし、社会統合もされたがらな
い」と述べる人もいた。このようなジプシーに対して強い嫌悪感を
あらわにした筆者の友人たちもいた。

「何か強い嫌悪を感じ、なぜだかわからないがいらっしゃせら
れる。物乞いの民族。つねに何かネガティブなイメージがある。
麻薬を売っていて子どもがたくさんいて教育も受けていない。」

⋮ E（男性、二十代）

「ジプシーは嫌い。物乞いに子どもをつれているには腹が立
つ。トルコ人も嫌い。働かないから。」：L（男性、二十代）
リニュース在住で、すでに述べた、二〇〇四年の冬にタボラスを一部
強制破壊したヴィリニュス市長支持者でもある。

これらのような強い嫌悪感、しばしば理由のない嫌悪感ともまた
違った反応は、次のようなものである。

「ジプシーは知らない人・外国人みたい。ゆえにコミュニケーション
の必要性がないし、お互い（リトニア人とジプシー）
にそう思っているのではないか。なれなれしく話しかけてきて、
しつこいので関係は持ちたくない。」：F（男性、三十代）
「コミュニケーションをしたくない。彼らは信じられない。」：
M（女性、二十代）

「怖くはないが、コミュニケーションをしたくない。」：H

（女性、二十代）

「過去の体験（家にやつて来て物をねだられた）から怖いとい
うイメージがあり、接触はしたくない。」：G（女性、二十代）

「タボラスでああいうふうに（貧しく）暮らしているのも彼ら自身のせい。」：M（女性、二十代）

「ジプシーだけでコミュニティを形成して住んでいるのは彼らの選択だ。」：F（男性、三十代）

ジプシーは「我々」リトニア人と同等に語られるることは決してなく、さらにポーランド人やロシア人などのほかのどのマイノリティとも違うようである。このようにジプシーに完全なる部外者、異人としてのポジションを与える語りの上に、「さうにジプシーなど意識の中にはない」といった語りも見受けられた。それは次のようにある。

「きみ（筆者）の（ジプシーについての）インタビューを受けたあとから街でジプシーたちが見えるようになったよ。」：N
(男性、二十代)

これはインタビューで「ジプシーについては何のイメージも持っていない」と答えた友人が、インタビューの数日後に会ったときに筆者に話したことである。それまでは彼の意識の中になかったジプシーたちだったが、インタビュー後は街中で「ここにも、あそこにいる」というようにその存在が目に入ってくるようになったという。

Kの指摘は正しいもので、リトニア社会はジプシーの抱える問題に無関心かつ意識的に目をつぶっているように思われる。これまで見てきたように、ジプシーに関するネガティブなイメージは枚挙にいとまがない。しかし一方で、筆者がインタビューをおこなったほとんどの人々が、ネガティブな要素と同時にネガティブでない要素も挙げていたことが非常に印象的だった。

「エネルギーの気性とすばらしいダンスや歌。黒いのでいたあとから街でジプシーたちが見えるようになったよ。」：N
(男性、二十代)

「エネルギーの気性とすばらしいダンスや歌。黒いのでいたあとから街でジプシーたちが見えるようになったよ。」：N
(男性、二十代)

「エネルギーの気性とすばらしいダンスや歌。黒いのでいたあとから街でジプシーたちが見えるようになったよ。」：N
(男性、二十代)

「エネルギーの気性とすばらしいダンスや歌。黒いのでいたあとから街でジプシーたちが見えるようになったよ。」：N
(男性、二十代)

「まず子どもがたくさんいて貧しい。彼らは馬を盗み、働かない。自由である。生活様式が異なり、コミュニケーションができない、もしくは要らないので外国人のよう。次にロマンティックなイメージがある。音楽やジプシー女性のカラフルなスカートはとても好ましい。女性の中にはすごくきれいな人もいて、目に力がある。ソ連時代に流行していた映画やドラマで観たと

「ジプシー問題に目をつぶる無関心なリトニア社会にも問題がある。人々は『ジプシー？どこかで聞いたことがあるけど、彼らはどんな問題を抱えているの？知らないなあ…』といった感じ。」：K（男性、二十代）

ころ、彼らのライフスタイルや愛についても伝統的でいいイメージを持っている。」…F（男性、三十代）

「テレビでジプシーに関するニュースを見ると、気をつけなければと思う。」…O（男性、十代）

Hのような語りはまれである一方、典型的なのはFやGのような

語りである。「彼らは働かないし盗みをするし麻薬をつくっているし……でも音楽は好きだな」というように思い出したようにジプシーの好ましい点を上げる人が多かった。実際ジプシー（風）音楽のC

Dが売られていたり、テレビでもジプシーのアンサンブル・グループなどが出演したり、ソ連時代にはFで述べられているようにジプシーの登場人物が出てくる映画やテレビドラマが人気だったりしたという。悪いイメージが広まる中、彼らの特徴の望ましい部分だけは切り取られて、非ジプシー側に受け入れられてきたと言えるだろう。

すでに述べたように、リトアニア社会はジプシーとの接触を避けているように見え、実際例えばタボラスに行つたことのある人や、ジプシーの知り合いがいる、もしくは単にジプシーと接触したことがあるという人はとても少ない。では彼らは何かジプシーに関する情報を得ているのか。それは新聞やテレビなどリトアニアのメディアであるとほぼ全員が答えた。そしてインタビューであるユダヤ人女性が「メディアはジプシーに関連して、麻薬問題やタボラスの危険性などを頻繁に報道しすぎる。」と述べたように、リトアニアの

「ニュースでよく、タボラスで麻薬が見つかったと報道している。」…H（女性、二十代）

「テレビでタボラスに麻薬をつくる工場があるときいた。」…L（男性、二十代）

それでもヴィリニュスにある人権団体によれば、ジプシーに関する報道に少しづつ変化の兆しが見えている。⁽¹²⁾一〇〇四年には犯罪記事の多くには、その犯罪を犯した人がジプシーであると特筆されているものが多かつたが、二〇〇五年にはそのような記事は減ったという。リトアニアの新聞におけるマイノリティの表象についての研究をおこなったベレスネヴィチュウテとナウセディエネは、新聞ではジプシーは主に犯罪者、反社会的でマージナルな集団として描かれている[Betesenčiūtė and Nausėdienė 1999:70]と述べた。新聞記事に見て取れるのはジプシーが閉鎖的のこと、社会から分離していること、そしてそれがポジティイヴな隔離であるかのように書かれていることであるという [ibid:70]。

四・メディアによるジプシー表象

それでは実際にジプシーはメディアによってどう描かれているのか。ジプシーについて書かれた新聞記事をまず二つ詳しく紹介した

い。

10日はリトアニアで一番広く読まれているリエトウヴォス・リタス (Lietuvos Rytas) の、1004年冬に起ったタボラスの家屋破壊騒動直後の新聞記事 [1004年1月3日号:1,4] である。首都版のページでは事件が一面を飾っている。記事によれば、タボラスに合法的に建っている家は一つだけであり、他のすべての家はジプシーたちが建設許可もなしに建てたものである。家が壊されていくのを見てジプシーたちは、「いつものように行政や警察に向かって罵り」、リトアニアの大統領、EU、NATOに手紙を書くと言つたという。次に息子の家を壊された女性の話が紹介されている。そこではその女性が「家は麻薬商売で得たお金で建てられたものではない」と信じている」とわざわざ書かれている。そして記事は、その年ヴィリュース市側がタボラスに建てた警察官派出所には火がつけられたといつ、タボラスで起ったほかの出来事にも触れ、この出来事を「テロ行為」と記述している。

11日の記事はリエトウヴォス・リタスに続いて発行部数第一位のレスブリカ (Respublika) 紙の同日のもの [1004年1月3日号:1,4] である。レスブリカ紙はタボラスをまず「リトアニア最大の麻薬売買の中心地」と呼ぶ。破壊作業の様子についても詳しく書かれ、作業が始まると隣の小屋からジプシーの老婆が裸足で飛び出してきて、「ロシア語の悪態をつきながら」その小屋は自分のものだと主張したという。またタボラスの住民はいつものように、彼らには仕事がないから麻薬を売られている、と「嘘をついた」

とも書いている。またこちらはタボラスに合法的に建っている家はないとしている。

また、少し古いものではあるが筆者がリトアニア滞在中に収集した新聞記事を紹介したい。ジプシーについての記事はそのほとんどがタボラスについて触れ、やたらに前出のレスブリカ紙のようになどタボラスを麻薬がはびこる地区、やつには「麻薬センター」 [Lietuvos Žinios 1001年五月十三日号:3、同1001年九月十日号:5, Lietuvos Rytas 1000年六月二一日号:2, Respublika 1001年十一月七日号:4] のよつに呼ぶ。またある強盗事件についての記事 [Sostine/Lietuvos Rytas (2) 1001年三月十日号:8] は、被害者の「強盗犯はジプシーだった」とこう記憶を、証拠は一切ないにも関わらず載せている。犯人についてのそのほかの記述は「黒いジーンズ生地のジャケットを着ていた」というものだけである。また、ある農家から馬が盗まれた事件について書いた記事 [Lankinioj Sostine /Lietuvos Rytas (2) 1001年一月九日号:4] では、その農家に馬を売ったのがジプシーであったことから、馬を盗んだのもジプシーであるかのように書かれている。やつには「1001年に実施された政府によるジプシー統合プログラムについての記事 [Sostine/Lietuvos Rytas (2) 1001年三月十日号:3] では、「ジプシーの子どもたちの大部分はただで給食が食べられるから学校に通つている」と述べる。ほかにも「ジプシーの子どもたちは学校に行かない」という記述 [Kauno Diena 1000年六月二七日号:4] や「ジプシーは（リトアニア社会が）仕事を提供しても働かない」 [Sostine/Lietuvos Rytas

「1001年2月10日[7:3], 同1004年11月7日[7:2]」という記述はよく見られる。

五・あとおど考察

すでに述べたように、リトニアにおいては、「多く少数のジプシーに対してリトニア社会の反応や態度はとても厳しい。多くの人は実際ジプシーとの接触を持ったことがない。しかしメディアからジプシーに関するネガティヴな情報を得て鵜呑みにしている。そして人々の語りからは、ジプシーに関する様々な研究や著作で報告されているような、ジプシーのイメージについてその二面性が実際うかがえた。

人々はジプシーと聞くとまず彼らに関するネガティヴな側面を口にする。さらに彼らの語りから感じたのは、ジプシーを完全なるアウトサイダー、またはそうであって欲しい存在と捉えており、そして人々はジプシーを「コミュニケーションをとる必要がない人々」、「関係を持ちたくない人々」と考えていくということである。それゆえに意識的にか無意識的にか彼らの存在は目に入らないといったことも起るようである。ジプシーを捉える視座の前提にあるのは、ジプシーはリトニアの、そしてヨーロッパの部外者、「よそ者」[Simmel 1950]、他人、外国人という認識である。

「完全なるアウトサイダー」という前提が出発点であり、この前提がネガティヴに捉えられる」として、すでにあげたさまざまな

ネガティヴなイメージが沸き起る。ジプシーは、部外者が必要とされぬままあまな状況において手軽で便利なスケープゴート[Clark 2004:244]、「完璧なるスケープゴート」[Petrova 2004]の役割を演じさせられたことも指摘できる。

一方すでに述べたロマンティックでエキゾティックなジプシー像も「完全なるアウトサイダー」という前提から出発できる。インタビューをした大半の人々は、話していくうちに思い出したように「でもジプシーの音楽は好き」とか「カラフルなスカートはきれい」と述べていた。「我々の」ものとは異なるジプシーの音樂や服装、そして彼らの「情熱的な」気性に代表されるように、ジプシーをロマンティックな、そしてエキゾティックな対象として捉える視点は直接的にはネガティヴなものでない。しかしその根底にあるのは、彼らに対する数々のネガティヴなイメージの源泉となる考え方と同じである。クラークはロマンティックに描写されたジプシーは原始的で前近代的な「高貴な野蛮人」として捉えられたと主張する[Clark 2004:238]。ヨーロッパに広まっている一見ネガティヴでないイメージの裏側にあるのは「我々ヨーロッパ」とは異なる「高貴な野蛮人」としてのロマンティックでエキゾティックなジプシーを、積極的に切り離そうという動きではないだろうか。さらに高貴な野蛮さは「本物のジプシー」であるとの証とされ、「そのロマンティックでエキゾティックな役割は非ロマによってつくられ操作され」[Saul and Tebbutt 2004:3]てきた。クラークはまた、これらの非ジプシーによるジプシーのエキゾティック視とその役割付けを

「ロマンティック・オリエンタリズム」[Clark 2004:239] もも呼んでいた。いのちにロマンティック、エキゾティックといったネガティヴでないイメージの裏にあるのは、ヨーロッパとは相容れるいとのない異質さ、そしてそれゆえに「我々ヨーロッパ」とは対等ではない人々としてのジプシー像である。

ではこののようなジプシーを捉える視点は何か。それは社会的カテゴリー、社会集団である場合があるというのが、調査の過程で気づかされたことである。

リトニアのある研究者は「リトニア人にとってジプシーはマイノリティではなくアルコール中毒者や麻薬中毒者などのような社会的カテゴリー (social category) として認識されているから、リトニア人はジプシーを、彼らの肌の色や見かけでは差別していない」⁽¹⁶⁾と述べ、またあるジプシー関連NGOで働く非ジプシーの女性も「リトニア人はジプシーをマイノリティとは捉えておらず、社会集団 (social group) としてみている」⁽¹⁷⁾と述べた。だからこそジプシーはよりネガティブなイメージを持たれるのだという。リトニアの社会的マイノリティに関する論文において、「近所に住みたくない人々の集団」としてジプシーと並列して挙げられている社会的カテゴリーに属しているのは前科者、アルコール中毒者、精神異常者、麻薬使用者、同性愛者、AIDS患者 [Leonečkis 2000:417] などである。

いのちの類別方法はリトニアに限ったわけではない。ヨーロッパ社会にとって異質な存在であり続けた彼らは、起源もはっきりと

わからず祖国も持たないことをよって、周囲の人々によつてもあまりにイメージされ名付けられてもた。そして現在彼らは「マイノリティのリストから除外されてる」[Pogany 2001:90] のであり、マイノリティの地位さえ与えられておらず、「アルコール中毒者や犯罪者、貧困人々と同等のなつぱ者・厄介者、社会的に問題のある集団」[Leonečkis 2000:422]、そして「人間以下の種」[Guy 2001:4] としてやれ捕えられる傾向が強い」とがある。

1990年にハンガリーで出会った非ジプシーのNGO活動家は「"gypsy" と頭文字が小文字で書かれていることはエスニック・グループではなくて、その生活の仕方、社会的カテゴリー（移動生活をしている、酒飲み、働かない）としてのジプシーをあらわしている」⁽¹⁸⁾と述べた。チェコのジプシー関連NGOの非ジプシー職員によれば「チェコの人々はジプシーをまず社会的カテゴリーとして捉えている」という。バルカン半島でもジプシーはエスニック・アイデンティティを持つマイノリティとしてではなく、単に貧民として捉えられていた [Minority Rights Group 1995:27] という報告もある。

いのちのジプシー社会の態度を表す例としてペトロヴァは「反ジプシー法やその他のジプシーに対する迫害は、放浪生活への異議という観點から捉えると理解しやすく、それにはエスニシティといったものの役割はとても小さい」[Petrova 2004] と指摘した。

現代の定住化の流れとは移動民のどんなエスニシティも認めないともある [McVeigh 1997:16-17] と指摘する学者もいる。ジプシー

は特定のエスニシティをもつ集団というよりは、放浪者、浮浪者、ホームレスという社会的なカテゴリーに入れられている。彼らのエスニック・アイデンティティは周囲の非ジプシーからは認識されず、また脅かされた [Barany 1996:303]。これは社会主義時代の中東欧で、当時の社会的・経済的ニーズからもジプシーを労働者として社会階級に組み入れようとする一方、彼らの個別のエスニック・グループとしての存在を否定 [Pogany 2001:88-89] してきたこととも関係がある。またヨーロッパにおけるほかのマイノリティとは異なり、祖国の地というものが存在しないので、政治的にマイノリティとしての地位や権利を主張する手段を持たなかつたことも、今日のジプシーの位置づけに影響しているだろう。

現在では多くの国でジプシーはエスニック・グループやマイノリティとしてリストアップされではいる。バラニーは、東欧諸国の国家政策において起きた劇的な変化の一つは、チェコやハンガリーなどいくつかの国がジプシーに「エスニック・グループ」「ナショナル・マイノリティ」の地位を与えたこと [Barany 1996:313] であると述べた。フィンランド、オーストリア、マケドニアはロマニ語を公式に国のマイノリティ言語として認めていた [Matras 2002:258]。

しかし人々の意識の中ではまだまだと言えそうである。サロは、雑多な下層民の寄せ集めと認識されていたジプシーが、固有の言語を持っていると人々が気づき始めたことによって、彼らがエスニック・グループであるという認識は広まつていった [Salo 1982:264] と述べてゐる。しかし、このことは現代においてあまり当てはまら

ていない。リトアニアの例で云うならば、ジプシーをロシア人やポーランド人、ベラルーシ人、カラーム（タタール）⁽²⁹⁾などのマイノリティ・グループと並列できるとは考えない、また並列することに違和感を覚える人々は多いように思われる。ヨーロッパにおいて他者、アウトサイダー、「関係を持ちたくない人々」であるジプシーは、文化的・政治的なエスニック・グループとしては捉えられておらず、それよりはその社会的側面に焦点が当てられた、社会的に問題のある集団、解決されるべき「社会問題」[Minority Rights Group 1995:12] である。彼らは「我々」と云ふローマニティのイメージには含まれず、アウトサイダーのレッテルを貼られた逸脱者「ミッカー 1993:17」であり、「彼ら」として並置されたまま [Mitchell 2005:393] なのである。ジプシーは他のエスニック・グループやマイノリティとはその異質さが異なるといえよう。

ノルウェーの人類学者バルトは、ある集団が恣意的な帰属意識を持つ排他的な集団と定義されたとき、そのエスニック・グループの継続性の性質とは、エスニック・グループとしての境界の維持によるものである [Barth 1969:14] と述べる。エスニック・グループがその形成を担うメンバー自身の自己同定という行為によって、どう生成されるかに注目したのである。

バルトが言うようなこうした個人の帰属意識と自己同定から作り出される他者との境界は、自己の意識だけでなく他者によつても定められる。イサジフのエスニックな境界に関する議論は、あわにこの点について言及している。彼は、エスニシティとは境界の二重性

によるとしている。つまり、エスニックな境界の形成には社会化の過程を通して「内部から」形成される境界と、他集団との相互作用過程を通して「外部から」つくられる境界との二つがある [Isajiw 1974:122] のである。後者には他集団による名付けやステイグマ化 [カッフマン 1980] も含まれる。

ジプシー研究の蓄積は、ヨーロッパの非ジプシー学者を中心になされてきた。筆者も含めて、ジプシーに関する研究をおこなう非ジプシーの大多数の学生や研究者の頭の中では、ジプシーとは固有の文化、伝統、そしてときには言語を持ち、またジプシーとしての帰属意識を持つエスニック・グループである、という前提是自明のものとなっていると言えるだろう。実際にジプシーのコミュニティに入り込んで参与観察をおこなった人類学者によるエスノグラフィ

〔オーケリー 1986、Sutherland 1986、Stewart 1998〕では、どれも

ジプシーのエスニシティを構成する要素を探求している。ジプシートちがいかに自らと非ジプシーの間の境界を維持し、ジプシーとしてのアイデンティティを保ってきたかを描いている。

しかしここれまで見てきたリトニアの人々のジプシーに対する語りやイメージから導き出せる重要な要素のひとつは、ジプシー研究者でない一般の人々の頭の中では、すでに述べたように、ジプシーとはエスニック・グループではなく、それよりは社会的カテゴリー、そして目を向けたくない社会問題のひとつなのである。そしてジプシーは、何世紀も前からヨーロッパに存在しているにもかかわらず、いまだに完全なる部外者、アウトサイダーなのである。

ジプシー研究においては「内部から」、つまりジプシーの立場やそれに近いところから物事を捉えようとする研究が、人類学的なものも含め多数なされてきた。しかし一方でジプシーを常に取り巻いているはずの非ジプシーとの接触や、非ジプシーから見たジプシーについては研究がなされてこなかった。リトニアの事例から導き出された、そもそも「エスニック・グループではない存在としてのジプシー」像は、リトニアに、そしてヨーロッパに存在し続ける、ジプシーに対する過剰な嫌悪感や差別に大きな影響を与えていると考へる。イサジフの言う「外部からつくられる境界」、その境界を堅持している非ジプシーの語りに目を向けることは、ジプシーというヨーロッパの被差別民の研究にとって欠くことのできない視点である。

【注】

- (1) 「ジプシー」(英語) よび各地で「ジプシー」を表す語(ツィゴイナーー、ドイツ、ツイガニーロシア、チガーニョクーハンガリーなど) は他称である。自称は「ロマ」(複数形) とされ、メディアなどは現在では「ロマ」と呼びかえるケースが多い。しかし呼称のみを変えてジプシーの人々が直面する差別的な扱いの何の改善策にもならないこと、「ロマ」とはジプシーのある一集団の自称である可能性もあること、一部のエリート・ジプシーによる呼称の政治的な利用など、現在も論争的となっている。本稿では以下、引用などの箇所を除き「ジプシー」と記す。

- (2) フレーザーによれば、現在ジプシーの総人口はヨーロッパにおいて五百万人から六百万人と推計されている。しかしあと大きい数字を主

張する」ともできるだらうと彼は述べている「フレーザー 2002:386-387」。

(3) ロマニ語はジプシーの居住各国の語彙をかなり取り入れている」ともあり、そのヴァリエーションは様々である。

(4) 例えばスペインでは十六世紀からの定住政策によって、ハンガリーではマリア・テレジアの同化政策によって、それぞれの地域でロマニ語は話されなくなった。

(5) 起源については大きく分けて二つの立場がある。一つはジプシーとはインド起源で、固有の言語や文化を純粋なまま維持しているとする「インド起源説」であり、この説は学者のみならず、ジプシーの団結を図る活動家やエリート・ジプシーからも主張されることがある。もう一つの立場は、ジプシーとは近代資本主義の形成とともに、ヨーロッパにおいて貧民や移動民など下層の雑多な人間集団につけられたレッテルである、とする立場である。

(6) リトニア統計局 [Lietuvos Statistikos Departamentas, www.lsd.lt] より。

(7) 定まったルートもなくさまよう「放浪生活」ではなく、経済活動や年中行事と関係のある「移動生活」であることが報告されている「オークリー 1986, Sutherland 1986 など」。

(8) リトニア系およびボーランド系ジプシーの間では、実際言語および慣習に差異はない。単に首都ヴィリニュス地域のジプシーの一部が自らをボーランド系ジプシーと呼んでいるケースがあるのだという。

(9) ワラキア地方(ルーマニア南部)一帯に住んでいたヴァラフ・ジプシーの言語。彼らはルーマニアで奴隸化されていたが、十九世紀半ばにおいてはわれた農奴解放以後移動を開始した。

(10) キルティーマイは地名、タボラスはこの地域のニックネーム。以下タボラスと記す。

(11) リトニア語で「ジプシー」の意(他称、複数形)。自称とされる「ロー

マイ (Roma'、複数形)」は少しづつ浸透しているようではあるが、一般市民や新聞はいまだに「チゴーナイ」をよく用いている。

(12) 1100六年七月、リトニア、ヴィリニュスにてインタヴュー。

(13) Sostinė (フスティネ) はリエトウヴァオス・リタス紙の首都圏版。

(14) Lankinėj Sostinė (ランキンノイ・ソステイネ) はリエトウヴァオス・リタス紙のカウナス(リトニア第二)の都市版。

(15) Sostinė (フステイネ) はリエトウヴァオス・リタス紙の首都圏版。

(16) 1100六年七月、リトニア、ヴィリニュスにてインタヴュー。

(17) 1100六年七月、リトニア、ヴィリニュスにてインタヴュー。

(18) 1100六年八月、ハンガリー、ブダペストにてインタヴュー。

(19) 1100六年八月、チェコ、ブルノにてインタヴュー。

(20) 一三九七年に当時のヴィタウタス大公によってクリミア半島から兵士として連れてこられたトルコ系の人々。1100一年の統計では、リトニアに三三三五人(総人口の〇・九パーセント)居住している。彼らのうち旧約聖書に基づくカライ派ユダヤ教を信仰するものをカライム、ムスリムをタタールと呼ぶ。

【参考文献】

〈日本語文献〉

網野善彦 1987 『無縁・公界・樂—日本中世の自由と平和』平凡社。
オークリー、ジュディス 1986 『旅するジプシーの人類学』木内信敬訳、晶文社。

クローウェ、デイヴィッド 2001 『ジプシーの歴史—東欧・ロシアのロマ民族』水谷驍訳、共同通信社。

ゴッフマン・アーヴィング 1980 『ステイグマの社会学—烙印を押されたアイデンティティ』石黒毅訳、せりか書房。

ハンコック、イアン 2005 『ジプシー差別の歴史と構造—パーリア・シンドローム』水谷驍訳、彩流社。

- ↑ ノーフォーク 2002 『ノーフォーク—民族の歴史と文化』水谷翻訳、
平凡社。
- 「カーネギーハウス S. 1993 『トム・チャタード—ハムニケーション理論』」
河出書房新社。
- 〈英語・日本語文譜〉
- Anglickienė, Laima 2002 "Strangers in Lithuanian Folklore," *Nord Nytt* 85: 81-95.
- Barany, Zoltan 1996 "Living in the Edge—The East European Roma in Postcommunist Politics and Societies." In *Ethnic Conflict in the Post-Soviet World*. Leokadia Drobizheva, Rose Gottmoeller, Catherine McArdle, and Lee Walker eds., pp. 303-325. New York: M.E. Sharpe.
- Barth, Fredrik 1969 "Introduction", In *Ethnic Groups and Boundaries*, Fredrik Barth ed., pp.9-38. Boston: Little Brown & Co.
- Beresneviciute, Vida and Inga Nausediene 1999 "Trys Lietuvos dienraščiai ("Lietuvos rytas", "Respublika", "Lietuvos aidas") apie tautines mažumamas Lietuvoje [Three Lithuanian newspapers ("Lietuvos rytas", "Respublika", "Lietuvos aidas") about national minorities in Lithuania]", Sociologija: Minitis ir Veiksmas, 1 (3): 67-78.
- Clark, Colin 2004 "Severity has often enraged but never subdued a gipsy: The History and Making of European Romani Stereotypes." In *The Role of the Romanies: Images and Counter-Images of 'Gypsies'/Romanies in European Cultures*. Nicholas Saul and Susan Tebbutt eds., pp.226-246. Liverpool: Liverpool University Press.
- Guy, Will, ed. 2001 *Between Past and Future-The Roma of Central and Eastern Europe*. Hertfordshire: University of Hertfordshire Press.
- Isajiw, Wsevolod W. 1974 "Definitions of Ethnicity", *Ethnicity* 1(2):111-124.
- Leončikas, Tadas 2000 "Vertybės ir Visuomenės Mažumos [Values and Social Minorities]", *Kulturologija-Straipsnių Rinkinys [Culturology-Collected Papers]* 6: 413-431.
- Matras, Yaron 2002 *Romani: A Linguistic Introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- McVeigh, Robbie 1997 "Theorising Sedentarism: The Roots of Anti-Nomadism", In *Gypsy Politics and Traveller Identity*. Thomas Acton ed., pp.7-25. Hertfordshire: University of Hertfordshire Press.
- Minority Rights Group International 1995 "Roma/Gypsies: A European Minority", <http://www.minorityrights.org/admin/Download/Pdf/Romareport.pdf>. 1100年1月1日参照。
- Mitchell, Jennifer 2005 "Negotiating Identity Politics: Emerging Roma Ethnogenesis in the Post Socialist States of South Eastern and Central Eastern Europe", *Polish Sociological Review* 4(152): 383-395.
- Petrova, Dimitrina 2004 "The Roma: Between a Myth and the Future", *Roma Rights Quarterly* 1, <http://www.errc.org/cikk.php?cikk=1844>. 11月1日参照。
- Pogany, Istvan 2001 "Accommodating an Emergent National Identity-The Roma of Central and Eastern Europe", In *Race and Ethnicity-Critical Concepts in Sociology*. Harry Goulbourne ed., pp.79-93. London and New York: Routledge.
- Salo, Matt T. 1982 "Introduction", *Urban Anthropology* 11(3-4): 263-272.
- Saul, Nicholas, and Susan Tebbutt 2004 *The Role of the Romanies: Images and Counter-Images of 'Gypsies'/Romanies in European Cultures*. Liverpool: Liverpool University Press.
- Simmel, Georg 1950 *The Sociology of Georg Simmel*. Edited and translated by Kurt H. Wolff, New York: The Free Press.
- Sutherland, Anne 1986 *Gypsies: The Hidden Americans*. Long Grove: Leončikas.

Waveland Press.

〈新羅品事（新羅社靈・新羅田靈）〉

<Lietuvos Rytas>

Grumadaite, Rita

2000 "Čigonams-valstybės globa [For Gypsies-State's help]", Vilnius 22 June:2.

Trainys, Vygandas

2001 "Pakaunejė čigonai nepamiršta savo tradicinio amato [Gypsies' traditional trade is not forgotten in the suburb of Kaunas]", Vilnius 02 February:4.

Babickas, Darius

2001 "Čigonai-busimi profesoriai [Gypsies-future professors]", Vilnius 10 March:3.

Dumalakas, Arunas

2001 "Sostinėje siuntėja nesugaumamas čigonas [The capital is suffering from an uncatchable gypsy]", Vilnius 10 March:8.

Kuizinaite, Milda

2004 "Čigonų namus nušlavė ekskavatorius smugiai [Excavator's blow swept away Gypsies' houses]", Vilnius 03 December: 1, 4.

Kuizinaite, Milda

2004 "Paskutinė taboro viltis-Seimo kontrolerė [The last hope of Taboras-Parliament's inspector]", Vilnius 07 December:1, 2.

<Respublika>

Gurevicius, Ainiš

2004 "Tabore griuvo savavalški čigonų statiniai [Gypsies' selfish works fall in Taboras]", Vilnius 03 December:1, 4.

Mickutė, Liuminata

2004 "Valdžia cigonus tramde pažeisdama istatymus [The government is suppressing gypsies while breaking the laws]", Vilnius 07 December:4.

<Lietuvos Žinios>

Parafinavicius, Rolandas

2001 "Čigonai nori mokyties [Gypsies want to learn]", Vilnius 10 September:5.

Utyra, Evaldas

2002 "Vilniaus čigonų taboras išvaziuoja į Rusiją [Gypsy taboras in Vilnius leaves for Russia]", Vilnius 13 May:3.

<Kauno Diena>

Andriuskevičius, Arunas

2000 "Skurdas nutildė čigonų dainas [Poverty made gypsies songs silent]", Kaunas 27 June:1,4.

An Anthropological Study of Views and Images toward Gypsies in Lithuania

KARASAWA Yuko

Gypsies are a discriminated and ignored minority group living mainly in Europe. They have a distinct lifestyle, language, appearance, and customs, however preservation of these features depends on the subgroups and regions in which they live. In Lithuania, one of the Baltic States, there are about 3000 to 4000 Gypsies. Many people in Lithuania have a very negative image of Gypsies. Common perceptions are that they are thieves, swindlers, lazy, and dirty among other negative beliefs. Generally, drugs are also thought to be associated with Gypsies in Lithuania. This is due to the existence of the so-called notorious "drug center" where one tenth of Gypsy population resides. The drug center has gained notoriety among the non-Gypsy Lithuanian community because of the belief that it produces and sells drugs. In fact, almost all people interviewed on their perceptions of Gypsies have no regular contact with the Gypsy community and only receive negatively biased news about Gypsies from newspapers and television. However, at the same time, most people mentioned something positive about Gypsies, such as their wonderful music, dance, beautiful dress, or passionate temper. Another view is that Gypsies are like foreigners and as such, are regarded as total strangers, although they have been living in Lithuania for more than 500 years. Some Lithuanians interviewed said that they did not want to communicate with Gypsies and want to avoid them. Furthermore, it is widely believed among the non-Gypsy population that Gypsies are a social category or group, similar to alcoholics, drug addicts, or the poor. Gypsies are not regarded by non-Gypsy Lithuanians as a distinct ethnic group, as reported in many book or reports by non-Gypsy experts, but rather as a social problem to be solved. It seems that in Lithuania, Gypsies are not listed among other minorities such as the Polish, Russian, or Belorussian communities. Based upon the Lithuanian case, the view of Gypsies as not being a distinct ethnic group might have a significant influence on lasting hatred or discrimination toward Gypsies in Lithuania and the rest of Europe.

Keywords : Gypsies, Images, Ethnic group, Social category, Lithuania

